

1. 2020年1月～12月の気象概況

1-1 東海地方の天候の特徴

平均気温

月平均気温が「かなり高い」となった月が多く、年平均気温の東海地方平均は平年差+1.2℃となり、1946年の統計開始以降で最も高くなりました。

降水量

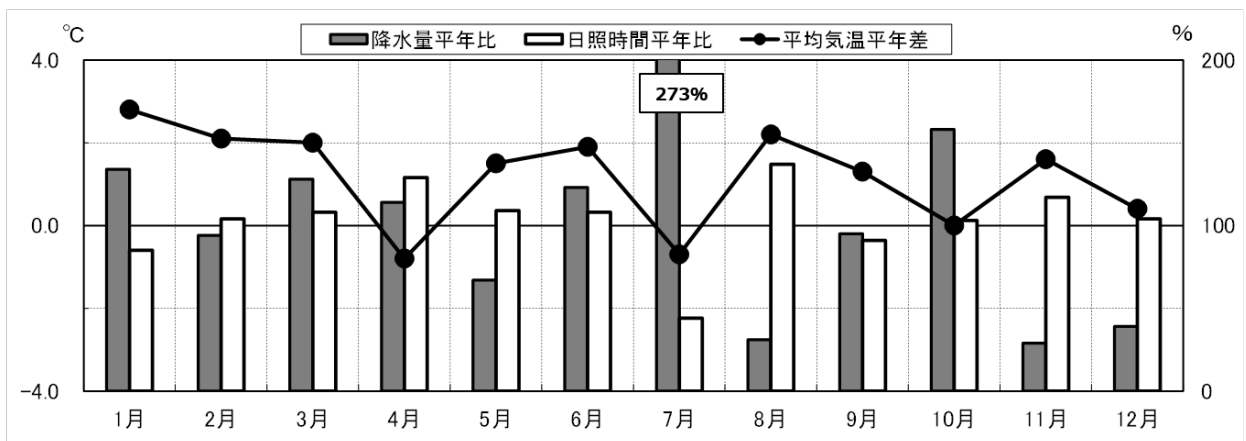
低気圧や前線の影響を受けて月降水量が「多い」あるいは「かなり多い」となった月が多く、年降水量は「多い」となりました。なお、7月は梅雨前線の活動が活発で、月降水量の東海地方平均は1946年の統計開始以降で最も多くなりました。

日照時間

月間日照時間は「平年並」から「多い」あるいは「かなり多い」となった月が多く、年間日照時間は「多い」となりました。なお、7月は梅雨前線の活動が活発で、月間日照時間の東海地方平均は1946年の統計開始以降で最も少くなりました。

※平均気温、降水量、日照時間については、東海地方平均の特徴を記述しました。東海地方平均とは、東海地方にある気象官署及び特別地域気象観測所（14地点）の平年差・比を平均したものです。

東海地方平均の月平均気温・月降水量・月間日照時間の推移



1-2 月別の東海地方の天候

1月

寒気の影響を受けにくく、天気が数日の周期で変わり、この時期としては曇りや雨の日が多くなりました。岐阜県山間部では月降雪量はかなり少くなりました。

2月

高気圧と低気圧が交互に通過し、冬型の気圧配置となっても長続きしませんでした。寒気の影響を受けにくかったため、岐阜県山間部では月降雪量はかなり少くなりました。

3月

低気圧と高気圧が日本付近を交互に通過し、天気が数日の周期で変わりました。南からの湿った空気の影響を受けやすかったため、月降水量は多くなりました。

4月

天気が数日の周期で変わりました。上旬と下旬は高気圧に覆われて晴れた日が多くなりましたが、中旬は低気圧が発達しながら本州付近を通過して大雨となった日がありました。また、月を通して大陸からの寒気の影響を受けやすく、月平均気温は低くなりました。

5月

天気は数日の周期で変わりましたが、高気圧に覆われて晴れた日が多くなりました。

6月

上旬は高気圧に覆われて晴れた日が多くなりましたが、中旬と下旬は梅雨前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、大雨となった日もありました。

7月

梅雨前線が東日本から西日本付近に停滞し、曇りや雨の日が多くなりました。特に上旬から中旬は梅雨前線の活動の活発な状態が続き（「令和2年7月豪雨」）、東海地方でも長期間にわたって大雨となりました。

8月

勢力の強い太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多く、顕著な高温・少雨・多少となりました。

9月

本州付近に前線が停滞しやすく、高気圧の縁辺を回って湿った空気が流れ込みやすかったため、曇りや雨の日が多くなり、上旬を中心に大雨となった所がありました。

10月

日本付近を高気圧と低気圧が交互に通過して天気が数日の周期で変わりました。9日から10日にかけては、日本の南岸に停滞した前線と台風第14号の影響で大雨となりました。

11月

天気は数日の周期で変わりましたが、移動性高気圧に覆われて晴れた日が多く、月降水量はかなり少なくなりました。

12月

上旬は高気圧に覆われた日が、中旬以降は冬型の気圧配置となった日が、それぞれ多くなりました。このため平野部では月を通して晴れた日が多くなりましたが、岐阜県山間部では中旬以降は曇りや雪の日が多くなりました。

1-3 梅雨

梅雨入り：6月10日ごろ「遅い」（平年：6月8日ごろ）

梅雨明け：8月1日ごろ「かなり遅い」（平年：7月21日ごろ）

5月から6月上旬にかけては、高気圧に覆われやすく晴れた日が多くなりましたが、6月中旬以降は梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多くなり、6月10日ごろに東海地方は梅雨入りしました。

その後7月下旬にかけては、梅雨前線が本州付近に停滞しやすく、東海地方では曇りや雨の日が多くなりました。7月31日ごろから日本の南に中心を持つ高気圧が東・西日本付近に張り出して本州付近では梅雨前線が不明瞭となり、8月1日ごろに東海地方は梅雨明けとなりました。

梅雨の時期（6～7月）の降水量の東海地方平均は平年比194%で「かなり多い」となりました。

梅雨の時期（6月～7月）の各地の
降水量(mm)とその平年比(%)

地点名	降水量 (mm)		平年比(%)
	2020年	平年値	
高山	1149.5	403.0	285
岐阜	906.5	506.9	179
名古屋	635.5	404.6	157
上野	648.5	385.9	168
津	538.0	380.7	141
伊良湖	725.0	338.1	214
浜松	1018.0	431.3	236
御前崎	851.0	473.8	180
静岡	1190.0	570.4	209
三島	1142.0	440.3	259
尾鷲	1132.5	802.9	141
石廊崎	945.0	428.1	221
網代	900.0	489.8	184
四日市	662.5	466.7	142
東海地方平均			194

※「高い（多い）」・「平年並」・「低い（少ない）」の範囲は、平年値の統計期間（1981-2010年）の値から求めています。30年間のデータ（たとえば1月の月平均気温であれば1981年1月、1982年1月、～、2010年1月の30個）の中で、高い（多い）方からおおよそ10番目までのデータの値の範囲を「高い（多い）」、11～20番目まで値の範囲を「平年並」、21番目以降の値の範囲を「低い（少ない）」としています。また、高い（多い）方から3番目までの値の範囲を「かなり高い（多い）」、28番目の値以降の範囲を「かなり低い（少ない）」としています。梅雨の時期の「早い」や「遅い」の範囲もこれに準じています。

1-4 台風

発生数は23個、上陸数は0個で、ともに平年を下回りました。7月の発生数は0個で、1951年の統計開始以来最も少なくなりましたが、8月と10月の発生数は平年を上回りました。

東海地方への接近数は2個（台風第12号、第14号）で、平年を下回りました。

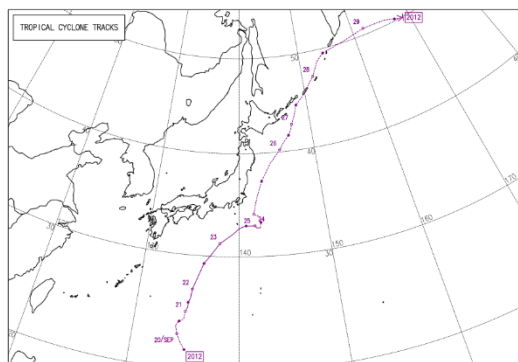
※東海地方に接近した台風とは、その中心が東海地方のいずれかの気象官署及び特別地域気象観測所（富士山を含めた15地点）から300km以内に入った台風を指します。

台風の発生数・上陸数及び東海地方への接近数

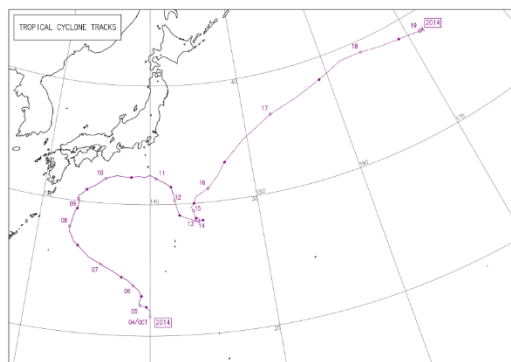
	月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	年
2020年	発生数					1	1		8	3	6	3	1	23
	上陸数													0
	東海地方への接近数									1	1			2
平年値	発生数	0.3	0.1	0.3	0.6	1.1	1.7	3.6	5.9	4.8	3.6	2.3	1.2	25.6
	上陸数	-	-	-	-	0.0	0.2	0.5	0.9	0.8	0.2	0.0	-	2.7
	東海地方への接近数	-	-	-	-	0.0	0.2	0.5	1.0	1.0	0.5	0.0	-	3.3

※接近は2か月にまたがる場合があり、各月の接近数の合計と年間の接近数とは必ずしも一致しません。

東海地方に接近した台風の経路図



台風第12号（9月19日～9月29日）



台風第14号（10月4日～19日）

※日付は経路図に記載した期間であり、台風であった期間とは異なります。

1-5 令和2年7月豪雨（7月3日～31日）と気象台の対応について

令和2年7月は、日本付近に梅雨前線が停滞し続け、前線に沿って西から流入した水蒸気と、平年より南西に張り出した太平洋高気圧の影響で南西から流入した水蒸気とが、日本付近で大量に集中して、東北地方から西日本にかけて記録的な大雨となりました。

西日本から東日本では、7月3日から14日にかけて広範囲で長期間にわたり大雨となりました。特に7月7日から8日にかけては岐阜県を中心とする東海地方や長野県で非常に激しい雨が断続的

に降って顕著な大雨となり、岐阜県では県管理の洪水予報河川の飛騨川が氾濫するなど大きな被害が発生しました。この大雨に際して岐阜地方気象台（8日6時30分）と長野地方気象台（8日6時43分）は大雨特別警報を発表して最大級の警戒を呼びかけました。

一連の大雨に対して、名古屋地方気象台は、7月3日から14日にかけて大雨に関する東海地方気象情報を28回発表して警戒を呼びかけました。さらに大雨の危険性が高まった7月7日14時には大雨に関する説明会を、7月8日7時30分には岐阜県の大雨特別警報発表に関する中部地方整備局との共同記者会見を、再び大雨の危険性が高まった7月10日14時には大雨に関する説明会および大雨に関する中部地方整備局との共同記者会見を実施しました。また、各地の気象台は、自治体や関係機関に対して、気象状況の解説や土砂災害等の発生の危険性について、メールや電話により随時連絡を行いました。